

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2018年7月 NO.204



[もくじ]

- 2～3 音楽活動と少し裏話—音楽活動の開始—宮地克也
- 4～5 人と人をつなぐ小さな楽器「ウクレレ」の魅力…福岡茉莉
- 6～7 ディズニーとともに① 出会いと現在、そしてこれから…山崎勇人
- 8～9 北見への旅…田中希和
- 10～11 「アンテナ」ユリカさんとの出会い…下尾仁
- 12～13 高知市文化振興事業団4～6月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

音楽活動と少し裏話①

—音楽活動の開始—

宮地 克也

音楽を始めた時、僕は二十五歳。

かなり遅い方だと思います。二十三歳で地元の大月町役場に就職し、産業振興課で観光や特産品開発などの仕事をしていました。当時、大月町に成立したばかりの風力発電の事業に僕は面白さを感じていて、「これからは環境問題が大きな関心事で、必ず環境ビジネスが重要なものになる」と考えていました。田舎や自然が存在していること自体を価値に出来ないか、排出権取引など新しいシステムを活用できないか、観光や特産品は大月町を知って貰う為のアイテム。そんな風に考え「大月町から世界を変えるんだ」と思って働き始めました。

しかし、理想や態度ばかり大きく、社会人として未熟で自身の情けなさに落ち込むばかりの毎日。連続する失敗や異動などで心が折れ、二十四歳の時重度の抑うつ病となり、休職しました。

休職中は抗うつ剤等を服用し、週に二度ほど点滴をする日々。生きる気力も心が動くこともありませんでした。これが音楽と出会い思わぬキツカケとなりました。

ある日、ふと兄の部屋にあったアコースティックギターが目に入り、触れてみると自分以外誰もいない空間に「ポローン」と音が響き渡り、「なんていい音なんだ」とズレたチューニングと錆びた弦の音に慰められた気がしたのを鮮

明に覚えています。音楽に関わる

時だけまだ心が生きていると思えました。感動しない、味もしない、生きていることも辛い。そんな中、

「悲しい音楽に触れば少し心が弾む」「音楽があれば生きていけないんだ」と感じ、音楽をやらう！と決心して退職しました。

二〇〇九年十二月、改札の前で、上京する僕を少し寂しそうな、少し心配そうな表情で見送った母と兄を今でも思い出すことがあります。

父からは「お前の人生だから好きに生きればいい。のたれ死んだら葬式くらいはあげてやるから」と見送りの代わりに言って貰いました。

東京に着いてからは、土地勘もなく、家賃の高さに驚き、住居も決まらないまま二週間が過ぎました。まだほとんどギターは弾けなかったので、歌う事に専念し、新宿で毎晩路上ライブをしていました。そんなとき、ピアノ弾き語りをしてるカズキという同年と仲良くなり、彼が住んでいた新宿から三十分くらいの所に住むことを決め、やっと野宿生活を卒業しました。

家が決まってからは、ギターの練習と作曲ばかりの日々。元々音楽をするつもりが無かったので、ほとんどギターは弾けず、作詞作曲どころかライブの経験もなく、とにかく練習の日々でした。春になるまでに六曲三十分のライブを全て自分の曲で出来る事を目標に、ひたすら部屋でギターを弾いて作曲に挑戦していました。一日十八時間くらいそんな風に過ごしていましたが、曲も詩もそう簡単には作れる訳もなく…。詩を考える時は、真夜中に三時間くらい散歩をしながら、星を見たり風にあたりたりして自分の内側を掘り下げました。曲に悩んだときは、ライブ

を見に行きました。流石東京というか、ライブをするミュージシャンは皆良い曲を持っていて、演奏も歌唱も上手く洗練されていて格好良かったです。そんな中最も衝撃を受けたのが、池袋で路上ライブをしているミュージシャンの演奏でした。はじめは遠くで聞いていたので有線で流れていると思っていたほどで、「これは凄い。こんな名曲をこんなレベルの高い音で聞かせてくれる人たちが、まだ名前も知られずゴロゴロいるのが東京なんだ」と感じ、「やってやるぞ」という気になりました。余談ですが、その方はその後メジャーデビューし、今では作曲家、編曲家としても活躍していて、ヒットチャートやテレビで見かけたりと刺激を受けています。

そんな風に、沢山の苦悩や刺激、孤独などの感情を感じながら曲を作りました。曲が出来ると欲が出てCDを作りたくりましたが、機械音痴で時代遅れの人間なのでパソコンと音楽ソフトを使つての録音は出来ず悩みました。当時パソコンは持つておらず、携帯はス

マートフォンじゃない。作った曲はテープレコーダーに録音し、音を重ねてみたいときは二つのテープレコーダーを使っていました。二〇一〇年時点でピンポン録音していたのは僕くらいじゃないでしょうか。

結局、散歩中に「レコーディング承ります」の貼り紙を見つけて立ち寄ったライブハウスで、マスターのカガさんに協力してもらい自作の六曲が入った初のデモCDの制作に取りかかりました。カガさんは無謀な僕に、沢山のアドバースとユーモアと優しさをくれました。ジャズの演奏者だった彼から、知らない知識や感覚、常識などをたくさん教えて貰い、閉店後に防音スタジオで何度も朝まで付き合つて貰いました。「やる気あるんだから、やりましょう」と何時間拘束しても追加料金も取らず、納得するまで付き合つてくれ、業界の常識を少しは知った今では、とんでもなくお人好しで愛情に溢れた恩人なのだと分かります。二〇一〇年三月、シングルCD『consolation』が出

来上がり、「リリースライブしましょう」というカガさんの一言で、人生初ライブが決まりました。

初ライブは持ち時間二十分。「初ライブします！」と声をかけると十五人くらいの人達がきてくれました。路上ライブでできた友達、ボイストレーニング仲間、僕と同じように田舎から上京してきた子、そして、四国からは学生時代の友達など。大切な人たちに少しでもちゃんとした姿を見せたくて、新宿で出会ったカズキにサポートに入つて貰い、二人編成でステージに立ちました。出番は二組目。客席より少し高いステージ、薄暗いライブハウスでスポットライトだけがステージを照らしていて、「今日からこうして歌っていくんだな」と思ったのを覚えています。

ライブが始まってからは夢中で、緊張も興奮も記憶にありません。ただただ無心で、CDの六曲を演奏しました。その時の自分の全てを詰め込んだ曲と詩を全力で伝えようと必死で、あつという間の充実した時間でした。ライブ後、「ちゃんとミュージ

シャンしてるじゃん。カッコ良かったよ。また来るから」と言ってくれた友達たち。そんな中に一人だけ「まだ全然ダメ。ギターも歌も下手すぎ。ピアノをサポートに使うのは良いけど、役割が重なつて二人で同じことして意味ない。でも伝えたいこととか意志は感じた。君は僕をやる気にさせたね」と、他の人とは違う意見を言う人がいました。まさかコイツとユニットを組むことになるとは。次号はこのヒラノ君について書くかと思えます。



みやじ かつや

一九八四年生まれ、大月町出身。大月町役場を退職後ミュージシャンに転向。現在はヒゲンジツシュギのボーカルとして活動中。

人と人をつなぐ小さな楽器 「ウクレレ」の魅力

福岡
茉莉



「それ、ウクレレですか？ ヴァイオリンですか？」車に乗せていたり、ケースに入れて持ち歩いていると、いろいろな方に声をかけて頂きます。そんな時、ついつい

自慢したくなるのが、ウクレレという楽器です。

【音楽のある暮らし】

私は、普段個人で観光やイベントのウェブサイトの制作と、取材や撮影といった仕事をしています。週末には高知市内の福利厚生施設などで音楽講師をしています。小さい頃から、クラシックギターやエレクトーンなどが傍にある暮らしで、学生、OLの東京時代、高知にUターンしてからも、ジャズやロックのバンドでキーボード、三十代半ばからは、いくつかのユニットのギターとして高知市内のライブハウス等で月一、二回ライブをしています。

【ウクレレとの出会い】

歌が苦手な私が、ギターだけのライブスタイルを模索していた頃、『ウクレレ・レディ』という曲と出会い、そのコロんとしたぬくもりある音と、軽やかで楽しげで、リラックスしたムードにいつぱんとりにこになり、楽器店にウクレレを買いに行き、小振りなタイプや、ネックの長いものなど、五、六本の中から、まーるい音のする一本の小さな「ルナ」というウクレレを手に入れました。嬉しくて、嬉しくて、コードを三つ覚えて、翌日のライブで初登場させました。二〇〇九年のことです。

【そうだ、ハワイへ行こう！】

それから、ハワイのウクレレ工房やお店のことを詳細に書いてい

るサザンオールスターズの関口和之氏の本と出会ったり、メールマガジンでハワイのウクレレが当選するなど、導かれるように、二〇一二年二月に、初めてハワイに行きました。関口氏がプロデュースする「ウクレレピクニック・イン・ハワイ」というイベントに参加するためです。寒い日本を発つて、ホノルル空港（当時）に降り立つと、なんともいぬ花のいい香りと暖かい空気、抜けるような青空が待っていました！（ちよつと高知と似たところがありますね。）

空港からオプショナルツアーで直行したハワイの老舗「カマカマカ」の工場では、たくさんの木材と、職人さんがそれぞれのパーツを製作する工程を間近で見ることが出来ました。工場見学を終えると、ミュージシャンでもあるスミス・カマカ氏が『カイマナ・ヒラ』というハワイの有名な山、ダイアモンド・ヘッドを歌った曲を歌ってくれ、カマカの音色とそれがあふれ出す和やかな空気感に感激しました。

ツアーでは、ミュージシャンから直々にウクレレを習うワークショップや、ウクレレピクニックのステージにミュージシャンと一緒



に立てる機会があり、世界で活躍する名だたるプレイヤーの演奏を生で聴くことも出来ました。特にハープ・オオタさんの夕陽の中で演奏してくれた『いそしぎ』は忘れられません。

その後も「ウクレレピクニック・イン・ハワイ」では、ワークシヨップに参加、カマカと並んで有名なメーカーのコアロハの工場訪問、ハワイのグラミー賞と呼ばれる「ナホク・ハノハノアワード」



の現地パーティーにも参加し、世界のプレイヤーと話をする機会や、毎年たくさんの方々が出来、エキサイティングな体験をさせてもらいました。

【音楽祭に出よう】

高知では、ギター教室と併せてウクレレ教室も開講していて、生徒さんと共に、街の中、空の下約十会場、約百二十組が参加するイベント「高知街ラ・ラ・ラ音楽祭」に毎年応募、出演し、よい発表の機会を得ています。

プライベートでは、横浜のウクレレ・ピクニックや、タイルのウクレレフェスティバルに遊びに行ったり、東京や関西の音楽イベントなどに参加し、ウクレレ製作者さんから直接お話を聞いて、いろいろなウクレレと楽しい出会いをしています。

【どこでもウクレレ】

ウクレレを始めて、演奏に呼んで頂くことも多くなり、ユニットを組んで、北川村モネの庭で花と自然に囲まれ演奏したり、黒潮町のTシャツアート展や、土佐神社の輪抜



け様でフラガールの皆さんのバックで演奏したり、日高村の酒蔵ホールでバンド演奏したり、赤岡町の冬の夏祭りや路上に並べられたコタツで演奏をしたりと、高知の様々なスポットでウクレレを弾かせて頂いています。また、カフェでも、ワークシヨップがきっかけで知り合った友人たちと時々、持ち寄りご飯を食べながら、美味しい発表会もしています。

【これからもウクレレ】

ウクレレと出会って、たくさんの人との出会いがありました。人

に愛されるその魅力はフォルムの可愛さや音色、手軽さ、などいろいろありますが、疲れた時に寄り添ってくれる友達みたいな「さりげない優しさ」と練習すれば必ず応えてくれる「確かな響き」かな？と感じています。機会があればぜひ皆さんも小さなウクレレを手にとってみて下さい。きっと優しい気持ちになれるはずです。

ふくおか まり

アトリエFで観光やイベントのウエブ制作の傍ら、二〇〇四年より週末に音楽教室を始める。また高知県内外のライブハウスや観光施設などでソロ、ユニットやバンドでウクレレやギターの演奏活動の他、国内外のプロミュージシャンのライブや、音楽イベントをサポートしている。

デイズニーとともに① 出会いと現在、そしてこれから

山崎 勇人

「デイズニーが僕に

与えてくれたもの」

私は高知県高知市在住、二十八歳。しかし、ほんの四年前までは千葉県浦安市に住んでいました。なぜ浦安にいたのか。それは私の好きなことを極めたかったから。好きなことをお話しするには幼少期まで遡ります。私は幼少期のほとんどを母の影響でデイズニーアニメに浸って過ごしていました。特にピーターパン、メリーポピンズという作品は当時のVHSが擦り切れるほど見ていたのを覚えています。またデイズニーランドデビューも三歳くらいの時でした。そんなデイズニー大好きな私は東京にはなかなか行けませんでしたが、毎年、家族や母の友人とデイズニー・オン・アイスという氷上

のデイズニーショーを香川県（たまた高知）に見に行くのが楽しみでなりませんでした。

そして月日は経ち、高校二年生の時に転機が訪れました。当時、キャリア教育の一環で県内の某企業の社長さんが学年全員に元デイズニーキャストの方の著書を進呈してくださったのです。その時はあまり意識をしなかったものの、この本、著者との出会いが進路について考える時期を控えた私に大きな影響を与えてくれました。

「デイズニーキャストへ」

高三になってアルバイトを始め、お給料をデイズニー遠征に使っていました。当時、二十五周年のイベントを開催していたパーク。アルバイト説明会を都内や

舞浜で頻繁に開催していました。

行ける日程を調べ、半年のうちに二回ほど上京し、品川と舞浜の説明会に参加しました。今考えるとその頃が一番、夢のような時間だったなあと思います。

そして、二〇〇九年三月に上京し、緊張しながらもキャストインクの面接会に参加しました。会社のセキュリティゲートで面接者タグをもらって敷地内のキャストティングセンターへと向かいました。中へ入るとミッキーやミニニーのぬいぐるみがお出迎えしてくれ、壁紙もデイズニー一色で一気に緊張が解けたような気がしました。そして受付を済ませ、エントリシートのようなものに記入していると順番に面接官のもとへ呼ばれます。お堅い面接では一切なく、

笑顔が素敵な社員の方とお話をしたのを覚えています。夢のような面接の時間はあっという間に終わり、帰高しました。それから数日後、電話で一言「あなたの配役が決まりました」と言われ、えっ？

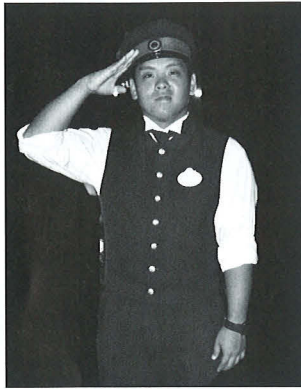
配役？と一瞬、気が動転してしまつたのを覚えています。デイズニーパークは青空を背景とした巨大なステージで、そこで働く人はキャスト、訪れるお客様はゲストと呼ばれます。そのキャストインクセンターからの一本の電話が私の人生を大きく動かした瞬間でした。

数週間は引越しや準備で慌ただしく時が経ち、いよいよ入社の日を迎えます。入社式では身だしなみをチェックされ、無事デイズニーファミリーの仲間入りをしました。私たちは、デイズニーユニバーシティという教育部門でオリエンテーションを受講します。まずは「Tins on Magic」という魔法のコツを全キャストの中から選ばれたユニバーシティトレーナーより伝授してもらいます。ここで少し魔法のコツをご紹介します。キャストの目指すゴールは「ゲストにハピネスを提供すること」です。そのために重要なこと、それはゲストとコミュニケーションをとる

こと。人と人がコミュニケーションをとっていく上でのポイントは「挨拶、スマイル、アイコンタクト」の三つ。デイズニーでは「いらっしやいませ」を使いません。なぜならコミュニケーションが生まれなからです。「こんにちは」と挨拶をすることで会話が始まります。そして、スマイルからスマイルが生まれます。こういったコミュニケーションを一人ひとりのキャストが自然にできる文化こそが年間三千万人のゲストをお迎えし、高いリピート率を誇る理由ではないでしょうか。もちろん、ハード面も大切です。しかしウォルト・デイズニーはこう言っています。「人間は誰でも、世の中で最も素晴らしい場所を夢に見、創造することはできる。設計し、建設することもできるだろう。しかし、その夢を現実のものにするのは人である」と。

デイズニーキャストのスタートラインに立った私は、部署のオリエンテーション、OJTへと進んでいきます。私はデイズニーシーの水域を航行する小型蒸気船のアトラクションに所属していました。アトラクションは操船そのもの。ある日のアトラクション中、私が操舵

室で舵輪を握っていると、隣に乗っていたトレーナーさんが水域に架かる橋の上のゲストに笑顔で手を振っていました。入社したばかりの私は「なぜ手を振っているんだろう？知り合いかな？」と思つて、船を降りた時に「手を振っていたのは知り合いですか？」と尋ねました。そうしたらトレーナーさんは「違うよ。ゲストが手を振ってくれていたからだよ」と。私はその瞬間、デイズニーでのホスピタリティを全身で感じたように思いました。それからというもの、ゲストとコミュニケーションを積極的に楽しむ自分になっていきました。パークでは様々な魔法があります。道案内、清掃、ごみ拾いひとつにしても魔法です。笑顔で手を振って「いつてらっしやい！」と声を掛けると、満面の笑みで「いつてきまーす」とゲストは返して



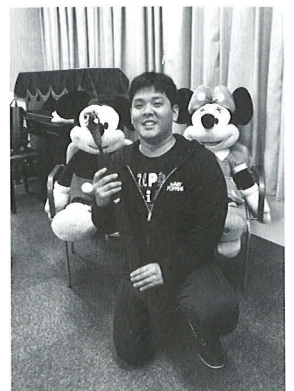
くれる。実は魔法をかけてもらっているのはキャストのほうかもしれない。パークで働いた五年間はここでは語り切れませんが、大好きなデイズニーに囲まれて、デイズニーの空間で過ごし学んだ夢と魔法の時間は私の大切な宝物です。

「これまでも、これからも」

デイズニーとともに

四年前に高知にUターンし、今はNPO法人が指定管理する施設の職員をしています。充実した毎日ですが、何か足りないことに気づきました。それは「デイズニー」です。高知にはデイズニーストアというグッズを取り扱うお店さえありません。でも高知にもデイズニーが大好きな方はきつといるはず！と、僕は元デイズニーキャストの一人として高知で「ハピネス」を感じられる空間を創り、デイズニーに親しみ、語れる場をプロデュースしたいと想い、二〇一七年二月から「D's KOCHIサロン」というイベントをはじめました。現在は二か月に一度、偶数月に開催しています。

毎回テーマを決め、デイズニーやデイズニーアニメーションに親

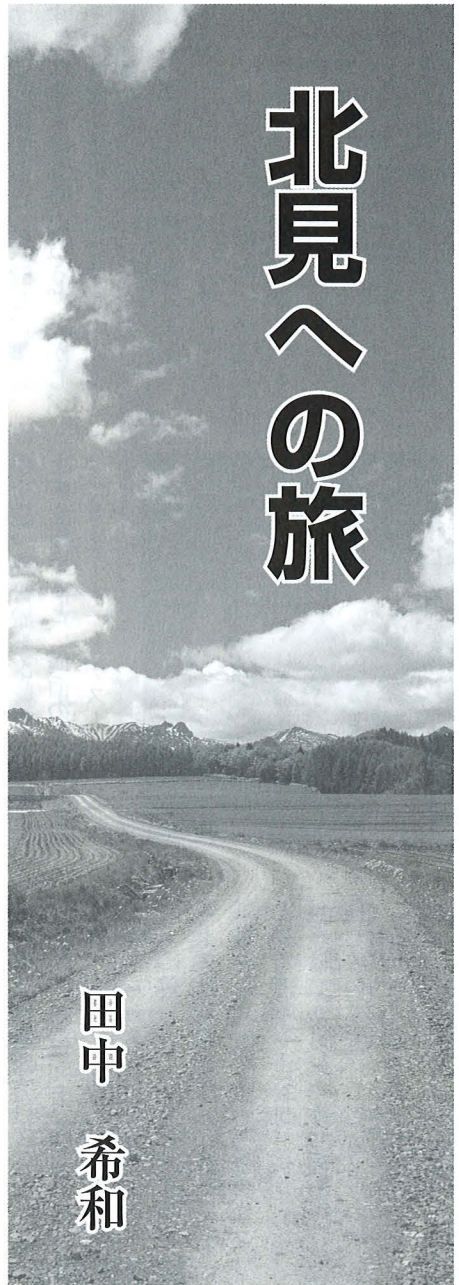


しむプログラムを企画。会場では大きなミッキー、ミニーのぬいぐるみもゲストをお出迎えしてくれ、一歩入った瞬間からデイズニーの空気を感じてもらえるでしょう。これまで九回開催し、のべ七十一名の方に参加していただきました。子どもから大人まで一緒に楽しんでデイズニーの「ハピネス」を感じていただけるよう、毎回準備をしています。興味のある方はぜひお越しください。

やまさき はやと

一九九〇年生まれ。高知市在住。元東京デイズニーシアトラクションキャスト。NPO法人で勤務する傍ら、「D's KOCHIサロン」というイベントを主宰し、高知に居ながらデイズニーに親しみ、楽しんでもらえるよう邁進中。

北見への旅



田中 希和

国内で私の行ったことのある場所といえば、東は東京デイスニーランドから西は長崎県長崎市と、

とても限られた範囲で、都道府県でいうと千葉県から長崎県。その間でも富山県や岐阜県など行ったことのないところや、三重県や静岡県など通り過ぎたことがあるだけのところも多くあります。昨年、そんな私が北海道に行くことになりました。それも南のほうではなくオホーツク海に近い北見市。きっと機会がなければ行くことなく過ごしていたでしょう。とは言いつつ、オリンピックでのLS北見の選手の活躍により、もしかすると旅行で行っていたかもしれない

なあと今になっては思うところもあるのですが。

北見市へ行くにあたり、まずは「高知市 北見市 姉妹都市」とネットを検索しました。明治時代に坂本龍馬の甥である坂本直寛が北海道を開拓するため合同会社「北光社」を設立し、約六百五十人の高知県民とともに北光社移民団として現在の北見市に入植した頃まで遡るそうです。こういうときこそしっかり調べておけばより知識も豊富になるのだからうけれども、他の都合もあって深くは学ばずじまい。

これまでの学生生活を思い返してみても、小学校の社会科の授業

では、住んでいる地域のことについて調べるグループワークがあり発表したこともありましたが、日本国内の各都道府県の関係性などは深く学んだ記憶がありません。歴史の授業にしても天保の改革とか生類憐みの令とかは習ったけれど肝心のこのことについては覚えがなく、中学に上がってから習ったことも、アウストラロピテクスとか第一次世界大戦などしか覚えていないのです。高校生になっても、邪馬台国とか平安京とかはしっかり記憶にあるのに、各都道府県の関係性などについては覚えがなく、私の限られた人生のうち十二年間を振り返って全く記憶にな

いのだから、行ってから現地で学ぼう！と自己完結してパソコンをシャットダウン。今考えると、なんて諦めが早いんだろうと思います。

こんな日もありながら北見市へ。羽田空港までは余裕綽々。飛行機を乗り継いで女満別空港に行く途中、初めての土地に少し緊張し、そのせいか、いつも以上に酷い耳がきーんとなる飛行機特有の感覚。天気が悪いわけでもなかったのに、なんでこんなに耳が取れそうに痛いんだろうと離陸早々に気持ち沈みます。着陸後も沈んだ気持ち少し引きずっていましたが、そこは性格のせいかな北海道の持つ力のおかげか、空港から見える白樺の木や広大な草原を見ているとすっかり忘れていました。白樺なんて国語の教科書に載っているイメージだったので、本物が見られるなんて！と感動していたのです。

ホテルに向かう途中で北光社開拓記念広場に立ち寄り、北光社移民団の名前が刻まれた石碑や通ってきた航路を記した案内板などを

見学しました。一緒に北見に行った皆さんと、「誰かの先祖がいるんじゃないですかー?」「この人同じ名字やー!」などと言いながらわいわい過ごしました。北光社移民団は、かるぼーとを堀川沿いに少し東に行ったあたりから出港し、日本海から宗谷岬をまわって北見市へ向かったと記されていて、船の装備や市販薬の有無など、現在とはかけはなれた環境のなか、北



見市に到着するまでに船内で麻疹にかかって亡くなった方が数十名いたり、流水に進路を阻まれたこともあったと知りました。

翌日は、北網圏北見文化センターや北見ハッカ記念館・蒸留館、北見市立中央図書館などに立ち寄りました。北網圏北見文化センターには博物館の展示室があり、北見の自然や開拓などカテゴリーごとに展示されていて、その中には兵屋の屋内保存展示もありました。国から厚い保護を受け様々な生活道具を支給されていた屯田兵が北海道に到着すると兵屋が用意されていたのとは比べ、移民団の人々は、自分たちの住居に到着後に自らの手で建てなければならず過酷な暮らしだったそうです。

現代においても、高知から北見に行くとき気候や気温の違いに驚かされますが、当時のことを想像すると昔の人には頭が上がりません。冬の時期などは想像しやすすいでしょいか。ただでさえ暖房設備のない時代に、氷点下を下回る気温の北海道へ高知から行くことの大変さ。今のようには断熱材もなければ二重構造にもなっていない家屋。

隙間風がびゅーびゅー入ってきそうな壁。実際に展示を見ることで感じ取れることも多かったです。当初は、北海道に理想の地を、と開拓に向かったようですが、気候や土地柄など何もかも違う土地では従来のやり方が通用しなかったり困難も多く、礎を築いたことは確実だが成功とまではいかなかったと聞きました。

そんな高知と北見ではありますが、高知市民の図書館と高知県立図書館の合築にあたり、高知市から北見市立中央図書館に見学に行ったこともあるそうです。文化センターで知った昔の高知と北見の関係の逆で、高知も北見に学んだのだなあと思いました。私たち一行も新しい図書館を見学させてもらい、その中で、ボタン一つで蔵書を消毒できる機械があることに驚きました。CMなどのキャッチコピーで除菌や消毒といった単語をよく見聞きする今、誰がどんなふうに使った本かわからない、というのが気になって図書館から離れている人にとってはとてもうれしい機械ではないでしょうか。実

演では光と風で消毒していて、文

化センターで知った開拓時代に比べ大きく文明の進化した現代に生きていることを実感しました。たった二泊三日の北見市滞在でしたが、昔と今の差をひしひしと感じることができました。これを機に、もっと他の土地へも行ってみようかなと、少し外に目を向けたくなるような貴重な旅になりました。



屯田兵屋の屋内保存展示

たなか きわ

一九九〇年生まれ、高知市在住。高知市展事務局担当。姉妹都市美術作品交流の委員・実務者間の交流のため、きたみ市民芸術祭が七十回を迎えるにあたり北見市を訪問。

「アンテナ」 ユリカさんとの出会い



下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がろう。すると、面白いことがやってくる。

平成十一年、高知市民ミュージ

カル「光の中で…」に出演した時のこと、練習前半に親睦会があった。その時どこかで見たことのある女性がいたが、なかなか話しかけられないまま一次会が終わり二次会のカラオケになった。

どこかで見た



ことのある女性が山本リンダの「狙い撃ち」を歌いだした瞬間ハツと思いついた。ついこの間見たNHKのど自慢高知大会で歌い踊っていた人だっ！と。

や、のど自慢出ていましたか？と質問すると、はい出ていましたとの返事。やっぱり。

彼女の名前は、嶋崎ユリカさん。ユリカさんは多才な人で、現在もバンドや演劇、踊りなどをやっている。しかも、その全部でレベルが高く、僕も何かやる時にはユリカさんをお願いすることが多い。ユリカさんとは沢山のパフォーマンスを一緒にやったが、その中でも印象に残っているのは、声と言葉のボクシング全国大会である。声と言葉のボクシングとは、三人一組でボクシングのリングの上で赤コーナーと青コーナーに分かれ、自作の詞などを読み合い、観客が良かったと思う方の札を上げ、多い方が勝ち上がっていくというものである。

僕とユリカさんともう一人(田村さん)は、二年連続で高知代表として全国大会に出場した。チーム名は昭和歌謡曲B面。一回目は二回戦で敗退したが、二回目はあれよあれよと勝ち上がり決勝戦まで進んだ。決勝では観客票が真つ二つになり、三人のゲスト審査員の票で決めることになった。二対一の判定で残念ながら敗れてしまったが、全国準優勝という結果は、ユリカさんなしではなかったと思う。

これは、全国大会で披露したものだ。

THANK YOU
2012.10.27



「声と言葉のボクシング」全国大会
2012年10月27日 横浜市で開催
結果、全国2位!!
応援、本当にありがとうございました!

昭和歌謡曲B面チーム 下尾仁 田村5か 嶋崎ユリカ

「フレフレ自分」(全文)

(嶋崎) まったく…。なんでこんな

なにトロいのかしら。ほん

とにもう。それに何よ

その服、超ださっ。こん

なのと仲間だなんてほん

と恥ずかしいわ。

(田村) どうせ私はかわいくな

いし。

(下尾) まったく、お前トロいん

だよ!!

(田) どうせ私は何やったっ

て下手だし。

(嶋) まったく、やってられな

いわ。

(下) どうする? メンバー変

える?

(嶋) そうね。これじゃいいも

の作れないわ。

(下) この、クズが!!

(田) なんて私ばかりこんな

こと言われなきゃいけない

いの? もう嫌だ…何も

できない…自分自身が嫌

だ…

(田) フレーフレーじーぶーン。

フレーフレーじーぶーン。

(下) あ?

(嶋) 何ブツブツ言ってるの?

(田) フレーフレーじーぶーン。

フレーフレーじーぶーン。

(下) 聞こえる?

(嶋) ううん。

(下) もっと大きな声出して言

ってみろよ。

(嶋) もっとできるでしょ?

(田) フレーフレーじーぶーン。

フレーフレーじーぶーン。

(下) もっと、もっと出るだろ!!

(嶋) できるわ!!

(田) フレーフレーじーぶーン、

フレーフレーじーぶーン

!!

(下) そうだ!! もっと出るぞ!!

もっともーっとでつかい

声が出るぞー!! もっとも

っと出せー!!

(田) フレーフレーじーぶーン、

フレーフレーじーぶーン

!!

(下) そうだー!!

(田) これでいいの?

(嶋) そうよ、最

高ー!!

(田) なんだかす

ごく声が出

た。ちょー

気持ちいい。

(嶋) そうよ!!

(下) 誰だって秘

めたエネル

ギーを持つ

ている!!

(嶋) 自分の殻を

破ることができるのは自

分自身!!

(田) さああなたにもできる!

(下) もっと自信を持って!!

(嶋) 大丈夫。みんな受け止め

てくれる!!

(田) できないことは何一つな

い!!

(三人) あなたの魂が叫んでいる

!!

これからもユリカさんとはいろ
んなパフォーマンスを一緒にやら
せてもらいたい。

ちなみに、ユリカさんはザ・テ



リーズというバンドのボーカルを
十七年やっている。毎月第一土曜
日にパラダイムというライブハウ
スで歌っているの、ぜひ見に
行ってほしい。見れば、彼女のファ
ンになってしまうだろう。

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐら
いに演劇に目覚め、日夜面白い事
はないかとキョロキョロしている。

4 ~ 6月の事業から

第七十回高知市文化祭事業

今年第七十回を迎えた高知市文化祭事業は、高知市文化祭と高知市展の大きく二つに分かれています。高知市文化祭には毎年、舞台や音楽、演劇など多くの団体にご参加いただいております。高知市展は公募・無審査のアンデパンダン展として広く親しまれています。

この高知市文化祭のスタートとして、四月八日(日)に第七十回高知市文化祭開幕行事「土佐の息吹―鼓童と舞踊による芸術の融合―」を上演しました。本公演は、第一部・鼓童と第二部・KOSHOUの二部構成で、佐渡を拠点とする世界的評価も高い太鼓芸能集団「鼓童」の演奏と、高知出身で初めて鼓童の研修生となった若者の物語を、地元高知で活躍する役者やダンサー総勢百十一名によってミュージカル仕立てにした舞台の両方を楽しめるものでした。

第一部の静と動の緩急を組み合わせた迫力ある演奏は会場を沸き立たせ、第二部の舞台では、志半ばで道を絶たれた若者の舞台芸術の世界への想いの種が出演者によつ



て見事に繋がり、満開の花を咲かせました。今回の高知市文化祭へは、全四十行事が参加しており、四月から六月にかけて、展覧会や舞台、コンサートなどが開催されました。

五月二十六日～六月十日まで開催された第七十回高知市展では、絵画・日本画・書道・

Cul^{カル}チャーず

平成30年度会員特典が追加されました！

①パルコ企画制作「チルドレン」

10月10日(水) 18:30開演
S席7,500円、A席4,500円→S席6,750円、A席4,050円
招待枚数はA席10枚

②橋爪功主演「父」

3月6日(水) 18:30開演予定
S席7,000円、A席4,000円→S席6,300円、A席3,600円
招待枚数はA席10枚

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

先端美術・彫刻・陶芸・工芸・写真・ペン字・デザインの十部門で五四五名・六九六点の作品が、姉妹都市である北海道北見市からの美術交流作品三一点とともに展示されました。来場者アンケートには、アンデパンダンで挑戦的な作品が見られるのが楽しい、来年も楽しみにしているという意見もありました。期間中、七十回記念として来場者全員に北見の土産を配布したほか、来場者七十名ごとに高知市展専門委員の制作した小作品をプレゼントする企画も行いました。また、女子カーリングチーム・L S北見のピョンチャンオリンピックでの銅メダル獲



得を祝って、本物のカーリングストーンとブラシを展示し、こちらも来場者の関心を集めていました。

会期中の六月三日には小中学生を対象にしたこどもアートまつり「あなたダビンチほくピカソ」を実施し、植木鉢に絵を描いたり、思い思いに土佐和紙を貼ってオリジナルのうちわを作ったりと美術に親しみ楽しんでいました。学校では体験できない美術本来の面白さを子どもたちに伝えることができたのではないかと思います。



〈開幕行事入場者数 昼の部・八四一名
夜の部・五三〇名／高知市展来場者数 二
七五六名／こどもアートまつりパスポート
販売枚数 三七八枚〉

四国素展(そてん)～芸術資本宣言～

これまで「画楽プロジェクト」[素展]を企画して障害者アートの今を紹介してきたアートセンター画楽が今回は志を共にする四国の事業所と協働して障害者アートやアートグッズを収集。今回はフィールドを四国に広げ、コンセプトは前回の素展のResource Exhibitionのまま、「今を暮らす人々に生き方のヒントとなる展示」を目指します。会期中、アートグッズの展示販売や参加型のWorkShopも開催予定です。

8月8日(水)～12日(日)10時～18時(最終日は16時まで)

かるぼーと7階市民ギャラリー第1・2展示室で。入場無料。

詳しくは、〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化振興事業団 088-883-5071 までお問い合わせください。

RESOURCES



高知を撮る

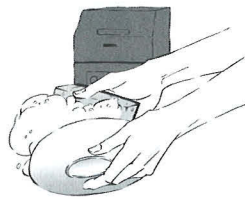
第34回写真コンテスト入賞作品

龍馬になった夜もある (平成29年7月5日 赤岡町) 篠原 真弥

「男には絵金になりたい夜もある」。しかしこの店の主は龍馬になってしまった！人の良さそうな、この屈託のない笑顔にはつい撮らせてしまった。

皆さんも経験があるかも知れないが、家電は一つ壊れると、何故か時期を同じくして次々壊れてしまう。電気製品を買う時期が同じなら壊れる時期も同じくらいになるというところだろう。洗濯機や冷蔵庫など白物家電と言われる大型電気製品が壊れると出費も手間もかかって、結構ストレスが溜まる。

不便の不慣れ



風俗歳時記

我が家では掃除機、洗濯機に続いて、夜中に食器洗い乾燥機が壊れた。耳の近くで水音がするのでその音の方を振り返ってみると、台所の床が浸水していた。マシヨンの下の部屋への水漏れを危惧しながら、いそぎバスタオル二枚で吸い取った。これが留守中だったから…とゾッとする。そもそも食洗機派ではなかったが、「共働きで食洗機の無い家なんて、聞いたことない」と函に衣着せぬ物言いのママ友に指摘されたことにシヨックを受け、当時やっとの思いで購入した。食洗機は十五年くらい毎日朝晩働いてくれ、食器洗いの家事から解放さ

れた生活が当たり前になっていた。突然の故障によって、再び手洗いの生活へ…これがなかなかキツイ。私が子どもの頃は、食洗機どころか、洗濯も手洗い、風呂も薪、冷蔵庫には冷凍庫がなく、テレビも手で周波数をいちいち合わせたりしていた。台風が来れば電気や水道も止まり、ろうそくと井戸

水での生活が何日も続いた。それでも、これが不便とかめんどくさいとか親も子も言わなかったように思う。技術の発達と電気製品の普及によって、主婦は家事から解放され、今は女性も男性と肩を並べてしゃかりきに働いている。仕事をしながら家事を手伝う夫も増え、家事に多くの時間を費やしていた昔より今の方が、男女ともに多忙になっている気がする。

(立花香)



ザンクトペテルスブルグ 国立舞台サーカス

かるぽーとにサーカスがやってくる！
きらびやかな衣装に身を包んだサーカスおなじみのキャラクターたちが、心躍るプログラムの数々を披露。
ザ・エンターテインメントの役者が勢揃いの、夏休みのおでかけイベントの決定版！！

【プログラム】

空中ブランコ
アクロバット
ジャグリング／フラフープ
バランス芸／軟体芸
ピエロの曲芸ほか

上記プログラムは都合により変更となる場合がございます。
(動物の出演はありません。)

【日時】

2018年8月15日(水)
1回目 12:00開場 12:30開演
2回目 14:30開場 15:00開演

【会場】

高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

【料金】

全席自由
前売り 一般 3,000円 高校生以下 1,500円
当日 一般 3,500円 高校生以下 1,800円
※3歳未満は膝上鑑賞の場合は無料。
お席が必要な場合は有料。

【主催】

高知市文化振興事業団 高知さんさんテレビ

【お問い合わせ】

高知市文化振興事業団 088-883-5071

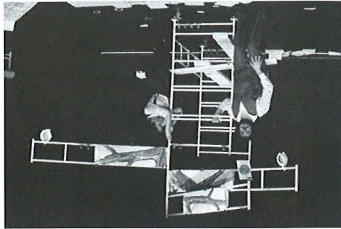
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

【主催】高知市文化振興事業団
【助成】文化庁芸術振興補助金(制作費) 高知市(制作費) 独立行政法人日本芸術文化振興会
【企画】近河鉄郎(konjac)合同会社

【料金】全席自由(3歳未満入場無料)
前売り 一般2,000円 高校生以下1,000円
当日 一般2,000円 高校生以下1,100円

【会場】高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
1回目 12:30開場 12:50開演 13:00開演
2回目 14:30開場 14:50開演 15:00開演

【日時】2018年8月2日(木)
ぼくには見えないもの、さみには見えていないもの。ぼくにだけ見えているもの、さみにしか見えないもの。あこちの彼とこちの彼女が出会うこと、毎日でもっと楽しくなる。イタリアの児童劇団ラ・バツカが贈る、心あたたまる物語。ご家族でお楽しみください。



イタリア児童演劇 La Baracca 高知・愛媛ツアー

「さかさまのお話」

風伯

おあずけ期間

大事で必要だと思っ持っているモノが、他人にとつては何の価値もないことに考えさせられた。
全部ではないにしても、知らず知らずの内に不要なモノを買ったり、買ったためにどこかにしまっておいたりしたもの、何の躊躇もなく排除されているのを見ると、考え込まざるを得ないのだ。
「不要負債撲滅運動」なる活動があ

ちよつとしたワケあって、事務所の片付けを自分以外の家族数人にもしてもらった。そのワケが緊急を要することだったこと、自分が時間をとれなかったことが重なり、いつもならしないうような自分の持ち物の片付けをしてもらう羽目になった。
片付けるものは、本をはじめ書類やいろんなこまごましたものだ。先日、その片付けられた事務所を見て驚いた。

るようだが、その活動家でパーソナルファイナンスプログラガーでもあるT氏はクレジットカードに息子の写真を貼つて不要な買い物をセーブしているのだという。
私などそんなことではセーブ出来そうにない。「不要品購買撲滅運動」を立ち上げたいくらいだ。そこでたとえは本やなにか欲しいモノがある場合はAmazonだった「ほしい物リスト」に、楽天などであれば「お気に入り」に最低一週間を入れておく。買わなくても満足している自分ごとで、なんとなくつと次の欲しいモノで前の欲しいモノが奥の方に押しやられ、いつの間にか忘れていく。そうなるから削除すればいい。
いわば「おあずけ期間」を設けて熱を冷ますわけである。これが結構効果があるのだ。結局は自分にとって不要品なのだろうと思う。我ながら情けない。

(霖林)

今号の表紙

「私の季節」

明神 功武

子供の頃、憧れていた物をデザインしました。

夏には虫取りや川遊びしかすることのない地元で、カブトムシやセミに比べ、なかなか捕まらないクワガタムシは「憧れの的」だったことを思い出しながら、子供の頃のように学校の木に登り、おもちゃのクワガタムシを木に設置して撮影したものを作品にしました。

(みょうじん いさむ/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

第68回 高知市

夏季大学

高知市立中央公民館事業

平成30年 **7月17日(火)** ~ **7月28日(土)**

(日・月曜日は休講の10日間)

火~金曜日：午後6時30分~午後8時(開場は午後6時)

21日(土)：午後3時30分~午後5時(開場は午後3時)

28日(土)：午後3時~午後4時30分(開場は午後2時30分)

高知市文化プラザ かるぽーと(大ホール)

■ 受講票 *大ホールが満員の際はモニター視聴をお願いすることがあります。

◆ 一般受講票 3,600円(10日間通し、おひとり限りどなたでも入場できます)

○ 販売場所

高知市文化プラザかるぽーと8階事務所および3階ミュージアムショップ、高新プレイガイド、高知県立県民文化ホール、高知県立美術館ミュージアムショップ、高知大丸プレイガイド、サニーマート(御座・瀬戸・高須・神田・土佐道路東・六泉寺・あその・中万々・山手・サニーアクシス南国・サニーアクシスいの・高岡・伊野店)、金高堂書店、島内書店、日新館書店、ローソンチケット[Lコード:62243]、チケットぴあ(セブン-イレブン、サークルK-サンクスほか) [Pコード:991-727]

◆ 割引受講票 2,600円(10日間通し、記名本人のみ入場できます)

○ 販売場所

高知市文化プラザかるぽーと8階事務所 月曜日を除く8:30~20:00(7/16(月)は販売)

旭文化センター(木村会館) 日・月曜日、祝日を除く9:30~17:00

*学生や長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳などをお持ちの方が対象です。

*枚数に限りがありますので早めにお求めください。

◆ 高校生・大学生限定トライアル聴講・特別受講票 300円(1講座分)

○ 販売場所

高知市文化プラザかるぽーと8階事務所 月曜日を除く8:30~20:00(7/16(月)は販売)

*400枚限定、おひとり2枚までお求めいただけます。

◆ 当日券 900円

*当日券は各講演日当日、席に余裕がある場合に限り会場で販売します。

*選り券をお持ちの方が優先入場となります。

■ 販売 平成30年6月23日(土)から

■ テキスト 400円(夏季大学期間中会場内で販売)

主催/高知市教育委員会・公益財団法人高知市文化振興事業団・高知新聞社・RKC高知放送
後援/NHK高知放送局・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・共同通信社高知支局

お問い合わせ 公益財団法人高知市文化振興事業団 ☎088-883-5071
(祝日以外の月曜日は休館日です)

